

で、黒ぶち眼鏡越しの目つきが、どことなく名浪曲師・広沢寅造を連想させる……などと思つていたら、声の調子も少し似ていた。

道場内では、新井さんを「お寺さん」と呼ぶ声が聞かれたが、本人はそうに呼ばれることを嫌う。

「坊主つて言われると、『誰が坊主なんや、坊主の資格なんか何もないわ』と怒るんですよ。『道場坊主やないか』言うから、『アホなこと言うなよ』と。『仕方なしにしてるんや、こういうことは。坊主じゃなしに、お勤めができるかできんのか、その違いだけや。おまえらだつて勉強したら、次は自分の番でできるやろ、だけど一つも勉強せんやないか』と。だからほつとくわけにはいかないから、私がやっているだけで」

少し説明が必要だろう。

道場には、普通の寺にはいる住職がいない。お勤めのときには、誰かが僧侶の代わりとなつて前に出て、導師役を務めなくてはならない。場所によっては、道場の所有者がすぐ隣や付属の建物に住んでいることがある。というより、ある人の家の敷地に、道場が建っているのだ。この場合、その主（道場主）が導師役を務める。こうした道場は専門的には「自庵道場」に分類される。第1章以降でその実例を紹介するが、跡取りを身内から出す点も含め、われわれのよく知る「お寺」の形態に近い。

一方、集落の人々の共有となつている道場を「惣道場」と呼ぶ。こちらは道場主がいない。こ

の場合、導師役を務める者は「道場役」や「道場坊主」と呼ばれる。さらには導師役を短い期間で交代する（参加者のみんなで持ち回りにする）ところもあり、こういうときは単に「当番」などと呼ばれる。

川合道場は典型的な惣道場で、今は新井さんが道場役を務めている、というわけだ。

新井さんは長年役所で働き、地元・和泉村（現在の大野市東部、穴馬も含む）の発展に貢献してきた。畳に絨毯が敷かれ、ソファをそろえた応接間の長押には、端から端までずらりと、12枚もの表彰状が並んでいる。なかには誰もが知る、超有名な政治家の署名も見られる。

そんな新井さんが道場役となつたのは、亡き父の影響が大きかった。

「父親が長年やつてたからね……。何かにつけて、仏のことを教えたがるんですよ。子供のころは逆らつたね。『俺がなぜそんなことせにやあかんねん』つて。心のなかは逆ですよ。『もうわかつてる。いずれ自分が務めることになるのはわかつてる。だからいらんこと言うな』つて気持ちでしたね。それが自動車の免許を取るときに、大野で受けるでしょう。こつからだとよう通えんから、市内の旅館に泊まっていました。そのときに、親父にはなーんも言わんと、近くの最勝寺行つて、せつかくここにおるんやからお勤めを習おうと。そこで初めて、仏教のことを学んだんです」

大野市明倫町にある最勝寺は、川合道場の手次寺だ。前述のように、川合の人々が直参門徒だったとしてもそれは昔の話。すべての道場に手次寺が割り当てられている。

「親父はなーんも知らん。だけどうちのお寺（最勝寺）の二縁さん（住職）が来たとき、親父が